世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

「大学の学校化」と大学生の「生徒化」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩田, 弘三 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/162

「大学の学校化」と大学生の「生徒化」

岩田　弘三

1. はじめに

最近の大学生は、「勉強志向」が高まっているという意味で、「まじめ化」してきている、との指摘は数多くなされている。たとえば、全国大学生活協同組合連合会『学生の消費生活に関する実態調査』では、学生たちが大学生活のなかで、どのような活動に重点をおいているのかを、1982 年以降、継続的に調査してきた。その調査結果をもとにすれば、「勉強」重視派の比率は 95 年から急増をみせている。さらに、このような「勉強志向」は、就職状況が一時的に好転した、2005・06 年あたりから 07 年までは減少する。しかし、リーマン・ショックを契機とする世界同時不況が押し寄せる、08 年以降には、ふたたび増加に転じている。以上の事実から、学生の「勉強志向」は、就職（雇用）情勢といった経済的要因の影響を、大きく受けている。つまり、就職状況が悪化すれば、高い大学成績や資格をそろえることによって、少しでも就職活動を有利に運ぼうとする、学生たちの意識と関連性をもつ点は明らかである。しかし、2005・06 から 07 年にかけての一時的好況期においても、「勉強」重視派の比率は、1992 年以前の状態にまでは後退していない[1)]。だとすれば、90 年代中頃に始まる「勉強志向」の浸透は、「平成の大不況」の影響のみによる一時的な趨勢とはみなせない。

たとえば、近年の学生文化の動向について、武内清は、以下のように指摘する。とくにここ 10 数年間にどの大学でも、授業出席率はたしかに高まっている。その反面、「高校と同じように、授業では出席がとられ、教師の指示にしたがって将来に役立つ内容が教えられるべき、と感じる」、「大学教師に従順な大学生が増えている」、という[2)]。このような事実をもとに、近年の「まじめ・勉強文化」の背景には、「大学の『学校化』」と歩調を合わせる形で、「大学生の『生徒化』」が進展している可能性があるのではないか、との指摘を行った[3)]。しかし、その指摘はあくまで可能性の示唆にとどまっていた。そこで、今回の調査データをもとに、その裏づけがとれるのかどうかについての分析を行うことが、本論の第 1 の目的である。

ここでいう「大学の『学校化』」とは、その善悪は別にして、大学の「初中等『学校化』」・「専門『学校化』」のことである。それゆえ、「学校化社会」といった用語に代表されるような、学校的価値観の社会への浸透を表す言葉としての「学校化」[4)] とは、異なる意味で用いていることを、あらかじめ断っておきたい。

「大学の『学校化』」の説明に話をもどすと、たとえば伊藤茂樹は、学生の「生徒化」をもたらした社会的背景の一つとして、以下の 2 つの要因をあげている[5)]。（1）高等教育のユニバーサル化・サービス化と、（2）1990 年代の社会・経済的状況である。伊藤の言葉を借りて具体的にいえば、（1）は、「入学時の懇切丁寧なガイダンスやオリエンテーションから始

まり、クラス担任による公私にわたる指導、研修旅行、カウンセリング、各種資格の取得のための指導、就職指導など、学生の現在と未来にわたる生活の様々な側面に関してきめ細かくケアすることがよりよい教育サービスの提供であるとされる。『生徒指導』『生活指導』のごとく、学業のみならず学生の生活全般に大学は介入し、指導するようになっている」。これは、「少子化時代に生き残りをかける大学にとって、学生を確保するために不可欠の手段でもある」、とする。(2) については、「少しでも将来を確実にするために、資格の取得など、目に見える形での自分の能力や努力、個性を表示するものへの志向性が強まり、これは『生徒化』につながる（ただしこの志向性を強めるのは不況や就職難のみではない)」、と指摘している[6)]。伊藤は、大学のサービス化が、「学生の生徒化」をもたらす要因とみなしている。しかし、これら 2 つの現象は、ニワトリとタマゴの関係にある。だとしても、図 1 に示したように、相互に影響を及ぼし合っていることだけは確かである。

それはさておき、(1) のような現象が、大学の「初中等『学校化』」である。1990 年代以降の大学改革論議のなかで、大学における成績・出席評価の厳格化などが求められるようになった。これらも、大学の「初中等『学校化』」に含めてよいと考えられる。また (2) に対応する形での、大学による資格関連科目の大幅な取り込みが、大学の「専門『学校化』」である。この流れは、学生のあいだに、語学、コンピュータ教育志向が高まり、それに対応する形で、大学の語学学校・コンピュータ専門学校化とも呼べる事態が進んでいった、90 年代以降から継続する動向といえる。

つぎに、大学生の「生徒化」とは、つぎのような現象を指す。大学生が「実態としても」、感覚的にも「中・高校生と変わらない『生徒』になっているのではないか」という問題関心のもとに、大学生の「生徒化」に最初に焦点を当てたのは、伊藤茂樹である[7)]。その論文のなかで、伊藤は、「生徒化」の構成要素として、以下の 3 つをあげる。(1)「未熟性」:「自

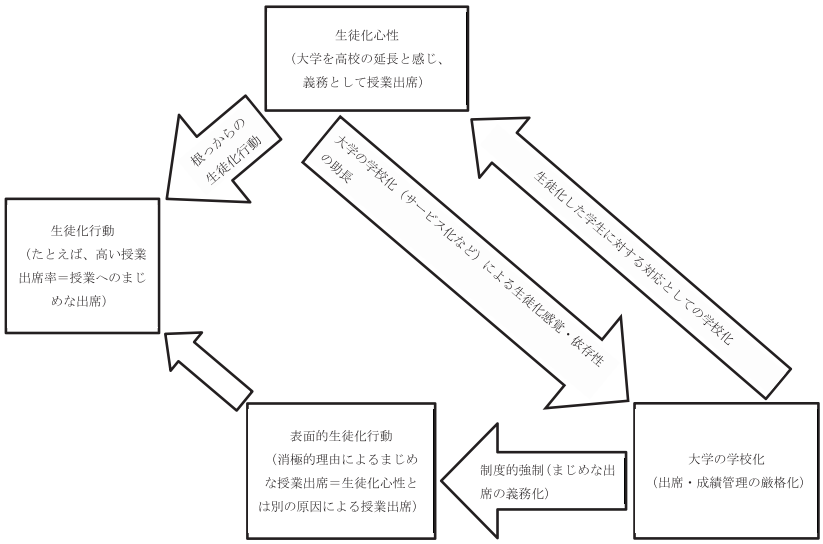

図 1　大学の学校化と大学生の生徒化の関係

分は成熟へ向かう段階の途上にある未熟者であり、学ぶべきことがまだ多く残っていると認識する」。(2)「他律性」・「依存性」:「学ぶべきことは学校が用意し、教えてくれる（自分で見つけ、身につけるものではない）と認識する」。(3)「一面性」:「自分を専ら上記のような存在（=「生徒」）として位置づけ、行動するため、他の価値が希薄になる。そして、「生徒化」の現象形態として、以下の4点を指摘する。①「大学や学部、学科、或いはそこで形成される友人集団への所属がアイデンティティとなり、自律・成熟した一人の個人としての自己イメージが希薄である」。②「長期的な展望を持てず、資格などの形で可視化・数値化される段階的な「仮目的」の連続的達成が目標となる。③大学が与える教育サービスに対して受動的に充足し、他のものを積極的・具体的に求めない」。④「生活の大部分が大学内（大学での人間関係なども含む）において展開する」[8]。

とくに（2）との関係で、伊藤は、「生徒化」現象の現れの一つとして、「大学や授業へのコミットメントは、深くはないが、量的には大きい」、つまり、「『生徒役割』を形式的、受動的に遂行する」一貫として、すなわち一種の義務としての授業出席率は高い、と指摘している[9]。これは、先述した武内清の指摘とも一致している。その一方で、読書時間は着実に減少をつづけている[10]。

つまり、「指示待ち世代」という呼称が示すように、高校時代の延長として、受け身の姿勢で、授業にはまじめに出席するものの、読書などをとおして能動的に学習することは少なくなっているといえる。だとすれば、近年になって、かつての「勉強文化」への回帰がみられるというより、正確にいえば、「生徒」的な学生による「勉強志向」が広まっている可能性がある。そこで、学生の「生徒化」と「勉強志向」の関係を明らかにすることが、本論の基本的な目的である。

とくに、先に指摘したように、学生のあいだに「勉強志向」が急速に高まっていくのは、1995年からである。それに対し、伊藤の研究のもとになった調査が行われたのは、96年12月～97年1月である。この点を勘案すれば、学生の「生徒化」と「勉強志向」の関係を明らかにするためには、「勉強志向」がより高まっている、最近のデータを用いた分析が必要である点はいうまでもない。

ところで、伊藤は、先述したような問題関心を前提として、学生の行動面における「実態」と、「感覚」つまり意識を複合し、生徒化の判定指標としている。しかし、たとえば、「面倒みのよい大学」などといったうたい文句に代表されるように、学生支援重視の一貫として、「大学のサービス化」が近年、大幅に拡大していることは、事実であると思われる。このような「大学のサービス化」の拡大により、図1に示したように、「生徒化」心性をそれほど有していないにもかかわらず、そのサービスの便利さ・快適さゆえに、「生徒」的行動をとる学生も存在する、と推測される。同様に、授業にまじめに出席するのは、大学における成績・出席評価の厳格化などといった制度的縛りがあるからにすぎない学生も、存在するはずである。だとすれば、大学の「初中等『学校化』」による、学生の行動面における「生徒化」と、心性としての「生徒化」は、分離して考察する必要がある。

そこで、「生徒化」心性を有する学生をまず抽出し、それら学生がいかなる属性・行動特性をもつのかを分析することが、本論の主要な目的である。

2. 分析に用いる指標

今回の分析で用いるデータは、2013 年に 13 大学を対象として行った調査である[11)]。

最初に、本論の分析で用いる指標について説明しておこう。

2.1. 「生徒化」傾向と「まじめ志向」

今回の調査では、以下の 5 つの側面について、大学・学生生活のあり方に関する意見、つまり大学観を聞いている。

①大学時代の位置づけ：「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考えるか、「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」と考えるか。

②楽な授業志向：「単位が楽に取れる科目を選択したい」か、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」か。

③出席管理への要望：「大学での授業も出席を厳しくとるべきだ」と考えるか、「出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」と考えるか。

④役に立つ授業志向：「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識や技術を教えるべきだ」と考えるか、「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になればよい」と考えるか。

⑤教員の指導 vs 学生の自主性：「学生の生活や学習について、大学の先生は指導したほうがよい」か、「学生の生活や学習について、学生の自主性にまかせたほうがよい」か。

以上の①～⑤間の相関係数を示したものが、表 1 である。さらに、表 2 は、表 1 の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。

表 1　大学観の相関係数

	大学時代の位置づけ	楽な授業志向	出席管理への要望	役に立つ授業志向
楽な授業志向	−.179**			
出席管理への要望	.076**	−.035		
役に立つ授業志向	.008	.088**	.076**	
学生の自主性より教員による管理重視	−.006	.072**	.075**	.121**

**1％水準で有意（両側）。
*5％水準で有意（両側）。

表 2　大学観の因子分析の結果

	因子	
	まじめ志向	生徒化傾向
大学時代の位置づけ	.737	.092
楽な授業志向	−.715	.242
出席管理への要望	.382	.522
役に立つ授業志向	−.093	.667
学生の自主性より教員による管理重視	−.091	.647

因子抽出法：主成分分析
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

第1因子は、2つの構成要素からなる。一つが、①「大学時代の位置づけ」と、②「楽な授業志向」である。②の因子得点には、マイナスがついている。よって、第1因子は、次のような2つの学生群を分ける軸となる。第1のグループは、①については「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考え、②については「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」と考える学生群である。第2のグループは、①については、「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」と考え、②については、「単位が楽に取れる科目を選択したい」と考える学生群である。

第2因子は、③「出席管理への要望」、④「役に立つ授業志向」、⑤「学生の自主性より教員による管理重視」、の3つの項目からなる。③と⑤は、大学の「初中等『学校化』」感覚といった意味で、まさしく大学生の「生徒化」傾向を表す指標になる。これに対し、④は資格志向につながる意識とみなせば、大学の「専門『学校化』」感覚だといえる。そして、これら2つの感覚が別因子として表れるのではなく、ともに同一因子を構成する要素となっている。このことは、大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、大学の「専門『学校化』」感覚も、合わせてもつ傾向のあることを示している。つまり、それら2つの感覚をあわせた意味での、「大学の学校化」感覚をもつことこそが、「生徒化」傾向の特徴になる。

以上の結果を踏まえて、本論では、第1因子を構成する2変数、第2因子を構成する3変数をそれぞれ足し込んで合成変数を作成し、前者を「まじめ志向」、後者を「生徒化傾向」、と名付けることにした[12)]。

2.2.　授業評価

今回の調査では、表3に示した15の内容について、自分の在籍する大学の授業に関する印象・感想を聞いている。さらに、表3では、参考のために、それら15項目と授業出席率の相関係数も示しておいた。

「私語の多い授業がある」と、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」といった変数のあいだには、やや高い相関が観察される。私語の多い授業が少なければ、教員へそれに対する注意を求める必要はない。だから、これは当然の結果といえる。また、相関係数の大きさだけを基準とすれば、ほとんど相関がないことにはなるものの、有意差に着目すれば、「私語の多い授業がある」と「先生が授業に熱心である」とのあいだには、有意な負の相関関係がみられる。つまり、授業に情熱を燃やさない教員が多くなれば、授業中の私語も増えることが示唆される。教員に対して同情的な見方をすれば、私語に悩まされることが多くなると、教育への情熱も冷却されるとの見方もできる。

表4は、表3の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。表4から分かるように、授業に対する評価については、4つの因子が抽出された。

第3因子は、「小人数、ゼミ形式の授業がある」、「グループで討論や作業をする授業がある」といった、「双方向型授業」の有無に関する因子となっている[13)]。

第1因子は、「授業全般に満足している」といった、授業に対する総合評価を中心にして、「先生が授業に熱心である」、「面白い授業がある」、「幅広い知識が得られる」、「専門的知識

が得られる」、「将来のキャリアに関連した授業がある」、「自分の人生について考えられるような授業がある」といった、授業内容に対する個別評価が加わった、7つの項目からなる因子である。ここでは、「授業に対する肯定的評価」と名付けることにした。さらに、以上7つの項目に比べて因子得点、すなわち関係性は多少低くなるものの、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」といった項目、および「双方向型授業」を示す第3因子の2つの構成項目も、第1因子の構成要素となっている。この結果は、大学成績のよい学生ほど、さらに「双方向型授業」が多くなるほど、授業満足度が高くなることを示している[14)]。

表3　授業評価の相関関係

	先生が授業に熱心である	面白い授業がある	幅広い知識が得られる	専門的知識が得られる	将来のキャリアに関連した授業がある	自分の人生について考えられるような授業がある	小人数、ゼミ形式の授業がある	グループで討論や作業をする授業がある	私語の多い授業がある	授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	授業のポイントが分かるよう、丁寧な板書をしてほしい	就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	授業全般に満足している	大学での自分自身の成績は良いほうだ
面白い授業がある	.456**														
幅広い知識が得られる	.465**	.531**													
専門的知識が得られる	.379**	.433**	.556**												
将来のキャリアに関連した授業がある	.257**	.333**	.353**	.469**											
自分の人生について考えられるような授業がある	.318**	.391**	.378**	.346**	.518**										
小人数、ゼミ形式の授業がある	.165**	.179**	.188**	.159**	.152**	.197**									
グループで討論や作業をする授業がある	.181**	.216**	.210**	.215**	.233**	.271**	.541**								
私語の多い授業がある	−.080**	−.004	.017	−.014	.042	.048*	.097**	.131**							
授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	.074**	.090**	.084**	.086**	.073**	.066**	.074**	.081**	.388**						
授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	−.111**	−.059*	−.049*	−.025	.020	.009	.009	.016	.176**	.236**					
就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	.028	−.080**	−.038	−.004	.052*	.026	.025	.047*	.184**	.134**	.388**				
授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	−.026	.013	.005	.048*	.094**	.091**	−.011	.044	.162**	.188**	.384**	.439**			
授業全般に満足している	.485**	.436**	.457**	.380**	.260**	.316**	.171**	.172**	−.118**	.016	−.188**	−.142**	−.160**		
大学での自分自身の成績は良いほうだ	.188**	.184**	.154**	.133**	.105**	.106**	.127**	.117**	.010	.091**	−.063**	−.003	−.008	.310**	
授業への出席率	.176**	.156**	.162**	.148**	.109**	.070**	−.013	−.009	−.048*	.065**	.021	.021	.050*	.187**	.347**

(1) ** 1% 水準で有意（両側）。
　　* 5% 水準で有意（両側）。
(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「1　90%以上」、「2　89～80%」、「3　79～60%」、「4　59～40%」、「5　39%以下」、となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

表 4　授業評価の因子分析の結果

	因子			
	授業に対する肯定的評価	授業に対する「生徒」的要望	双方向型授業	私語の状況
先生が授業に熱心である	.667	−.120	−.146	.142
面白い授業がある	.720	−.055	−.128	.105
幅広い知識が得られる	.748	−.039	−.188	.044
専門的知識が得られる	.705	.034	−.236	−.077
将来のキャリアに関連した授業がある	.614	.167	−.157	−.287
自分の人生について考えられるような授業がある	.642	.140	−.068	−.258
小人数、ゼミ形式の授業がある	.401	.153	.711	−.219
グループで討論や作業をする授業がある	.464	.206	.650	−.266
私語の多い授業がある	.012	.545	.274	.400
授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ	.143	.520	.086	.592
授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい	−.097	.691	−.168	−.051
就職活動に役立つことをもっと教えてほしい	−.055	.678	−.188	−.170
授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい	.010	.695	−.272	−.131
授業全般に満足している	.673	−.288	−.052	.218
大学での自分自身の成績は良いほうだ	.329	−.046	.138	.471

因子抽出法 : 主成分分析
回転法 : Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

第 4 因子は、「私語の状況」と名付けることのできる因子である。具体的にいえば、「私語の多い授業がある」といった事実認識と、「授業中の私語に対して、先生はもっと注意すべきだ」といった要望・評価、の 2 つの項目からなっている。表 3 のところで先述した理由により、これら 2 つの項目が同じ因子を構成するのは、当然の結果といえる。さらに、因子得点、すなわち関係性は多少低いものの、「大学での自分自身の成績は良いほうだ」といった項目も、第 4 因子の構成要素となっている。つまり、大学成績のよい学生ほど、授業中の私語に敏感であり、それに対する教員の統制を望んでいることが示唆される。

ここで、とくに注目したいのは、第 2 因子である。この因子を構成するのは、(1)「授業のポイントが分かるような、丁寧な板書をしてほしい」、(2)「授業で分からないところを教えてくれる人や、場所がほしい」、(3)「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」[15]、といった 3 つの項目である。(1)・(2) は、積極的に勉学に取り組むのではなく、高校時代の延長で、受け身の姿勢をもとに大学の授業に臨むといった、大学の「初中等『学校化』」感覚にもとづく要望である。さらに、(3) は、大学の「専門『学校化』」感覚にもとづく要望とみなせる。そして、それらが一体化するように結びついている。この意味で、授業への要望についても、表 2 と一致した結果が出ている。そこでこの因子を、「授業に対する『生徒』的要望」と名づけることにした[16]。

以上の結果を踏まえて、本論では、これら 4 つの因子ごとに、表の濃い網かけの項目だけを取り出して合成変数を作成し、それらをもとに分析を進めていくことにした[17]。

2.3.　学生生活の重点

今回の調査では、現在の生活の中で、表に示した 8 つの活動について、どの程度の比重

を占めているかを聞いている。それら8つの活動重視度について、相関関係をみたものが、表5である。

「アルバイト」、「異性（恋人）との交際」（恋愛）、「サークル・部活動」志向についてはいずれも、「学業、勉強」志向とのあいだに負の相関が観察される。つまり、「アルバイト」、「異性（恋人）との交際」（恋愛）、「サークル、部活動」、といった「課題活動」に励むほど、「勉学」志向が弱くなるといった具合に、敵対関係がみられる。それは、つぎの事実によって補強される。表5には、各活動と「授業への出席率」との相関係数も合わせて表示しておいた。それをみれば、「課題活動」志向が強いほど、授業出席率が悪くなる傾向がみられるからである。

表6は、表5の相関係数の数値をもとに、因子分析を行った結果を示したものである。

第1に、「ダブルスクール」のみならず「就職活動」が、「学業、勉強」と同じ第1因子として抽出されている。この点は、つぎのことを示唆している。つまり、1992年以降の長期にわたる就職状況逼迫の時代のなかで、就職、とくに正社員としての就職に対する危機意識が大きくなった。そして、それへの心理的圧力が、強迫観念化したとでも呼べる状態にまで高まった。この結果、少しでも就職を有利に運ぶために、「学業、勉強」を重視する傾向が強まった可能性が考えられる。すなわち、就職活動の一貫としての「学業、勉強」重視傾

表5　学生生活の重点の相関関係

	学業、勉強	ダブルスクール	サークル、部活動	アルバイト	趣味	友人との交友	異性（恋人）との交際	就職活動
ダブルスクール	.034							
サークル、部活動	−.136**	.035						
アルバイト	−.079**	.042	−.069**					
趣味	−.035	.044	−.030	.015				
友人との交友	−.020	.021	.180**	.104**	.225**			
異性（恋人）との交際	−.040	.077**	.090**	.122**	−.007	.145**		
就職活動	.102**	.202**	−.001	.062**	.110**	.120**	.124**	
授業への出席率	.262**	−.056*	−.052*	−.086**	−.043	.005	−.070**	−.042

**1%水準で有意（両側）。
*5%水準で有意（両側）。

表6　学生生活の重点の因子分析の結果

	因子			
	勉学・就職志向	友人との交友・趣味志向	サークル・部活動志向	アルバイト・恋愛志向
学業、勉強	.421	−.043	−.432	−.381
ダブルスクール	.687	−.071	.084	.049
サークル、部活動	.047	.047	.862	−.121
アルバイト	−.020	.077	−.225	.834
趣味	−.004	.837	−.144	−.074
友人との交友	.109	.686	.299	.169
異性（恋人）との交際	.342	−.042	.303	.517
就職活動	.712	.215	−.064	.058

因子抽出法：主成分分析
回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

向である。なお、「就職活動」を新たな質問項目として加えたのは、2013 年調査からである。だから、そのような傾向が、以前から存在したのか、近年に顕著な動向なのかは分からない。

さらに、学年別にみた場合、学生生活における「就職活動」の比重をみれば、無回答を除く、「大部分」+「かなり」の合計で、1 年生 5.1%、2 年生 4.2%、3 年生 29.1%、4 年生 28.7% となる。つまり、当然のことながら、1〜2 年生に比べ 3〜4 年生で、「就職活動」重視派の比率が格段に高くなっている。ただし、そのような学生の比率は、3 年生と比較して 4 年生では幾分減少する。4 年生のなかでも内定を獲得した学生は、就職活動に比重をおく必要のなくなることが、その比率の低下する原因になっていると考えられる。なお、標準偏差をみると、1 年生・2 年生はともに 0.02、3 年生 0.05、4 年生 0.07 となっており、4 年生では 3 年生より幾分高くなっている。つまり、就職活動を継続する必要のない内定獲得学生と、そうでない学生の二極分化が起こっていることが示唆される。しかし、この点に関していえば、今回の調査では、就職内定の有無に関する質問がないので、正確な解釈はできない[18)]。

第 2 に、「趣味」と「友人との交友」とが結びつく形で、同じ因子（第 2 因子）を構成している。「アルバイト」と「恋愛」についても同様である（第 4 因子）。2003 年調査までは、これら 4 つの活動は、いずれも独立した因子として抽出されており、10 年前までにはみられなかった傾向である[19)]。第 2 因子についていえば、「友人との交友」が、「趣味」を同じくする仲間に特化している可能性が示唆される。また、第 4 因子についてみれば、「アルバイト」と「恋愛」とはいずれも、基本的にはキャンパス外が活動の中心となる課外活動、といった共通点をもつ。この「アルバイト」と「恋愛」からなる第 4 因子に加えて、「サークル・部活動」の第 3 因子も、因子得点は多少低くなるものの、「学業、勉強」がマイナスの関連をもっていることも分かる。表 5 でも指摘したように、「アルバイト」、「恋愛」、「サークル・部活動」といった「遊び（課外活動）文化」を重視する学生ほど、「勉強文化」志向が弱くなる。つまり、それらが敵対的活動になっていることが、ここからも明確に再確認できる。

なお、先述したように、「就職活動」については、1〜2 年生で重視している学生がきわめて少ない。この点を勘案して、これを除いた 7 変数による因子分析も行ってみた。しかし、基本的な因子構造に変化はみられなかった。

以上の結果を踏まえて、本論では、次のような形の合成変数を作成し、それらをもとに分析を進めていくことにした[20)]。

(1)「勉強志向」=（「学業、勉強」+「ダブルスクール」）÷ 2。

(2)「就職活動志向」（3〜4 年生に限定）=「就職活動」。

(3)「友人との交友・趣味志向」=（「趣味」+「友人との交友」）÷ 2。

(4)「サークル・部活動志向」=「サークル、部活動」。

(5)「アルバイト・恋愛志向」=（「アルバイト」+「異性（恋人）との交際」）÷ 2。

2.4.　知的家庭環境（文化資本）

今回の調査では、家庭環境に関する質問項目として、子どものころ（小学生時代）に家族

との関係で、以下の（1）～（5）のようなことが、よくあったかどうかを尋ねている。（1）「家族に本を読んでもらうこと」。（2）「家族に勉強を見てもらうこと」。（3）「家族に美術館や博物館へ連れて行ってもらうこと」。（4）「家でクラシック音楽を聞いたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったりすること」。（5）「家族と社会のしくみや時事問題などについて話すこと」。（1）～（5）を足し込んだ合成変数を作成し、それを「知的家庭環境（文化資本）」と呼ぶことにした。

3. 「生徒化」傾向と学年進行、授業評価

それでは、今回の「生徒化」指標の妥当性を確認するためにも、基本事項として、「生徒化」傾向と学年進行、授業評価の関係を確認しておこう。

まず、図２は、学年進行による「生徒化」傾向の変化を示したものである。学年が上がるにつれ、平均値についてみれば、大勢としては「生徒化」傾向は減少している。高校から離れ大学生活が長くなるほど、「生徒化」傾向からの脱却が進行していくはずなので、当然の結果とみなせる。ただし、標準偏差の増加を考慮すれば、学年が上昇しても、「生徒化」傾向からなかなか抜け出せない学生の一群が存在することになり、学年進行とともに、「生徒化」傾向の高い学生と低い学生に分化していく様相が確認できる。だとしても、平均値・標準偏差とも、それらの差が最大になる、１年生と４年生を比較しても有意差は認められなかった。この意味では、今回の「生徒化」傾向の指標には、問題が残る可能性がある点だけは、指摘しておかねばならない。

つぎに、表７は、「生徒化」傾向と授業評価の相関係数をみたものである。心性として「生徒化」傾向をもつ学生ほど、行動面では「授業に対する『生徒』的要望」が強くなることが確認できる。また、「生徒化」している学生が多い大学ほど、教員に注意して欲しくなるほど、私語のうるさい授業がたくさんあることも示唆される。

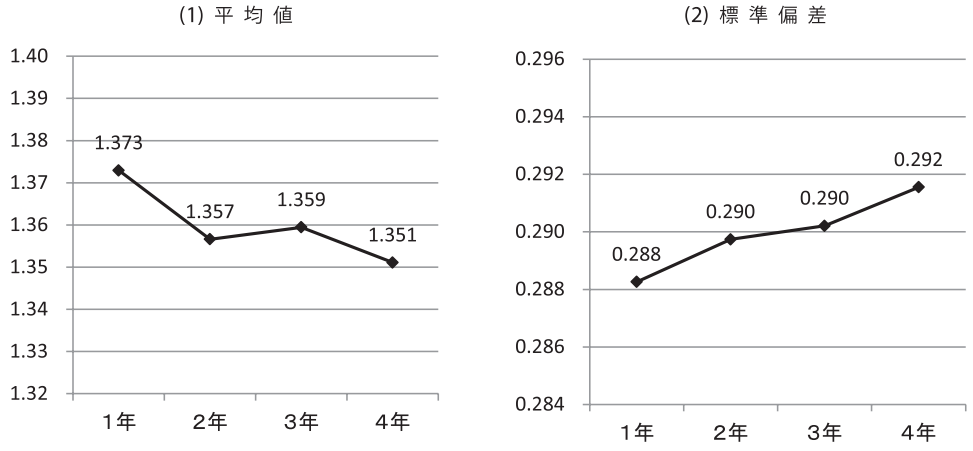

図２　生徒化傾向の学年進行

表７　まじめ志向・生徒化傾向と授業評価

	授業に対する肯定的評価	授業に対する「生徒」的要望	双方向型授業	私語の状況
生徒化志向	−.028	.270**	−.039	.124**
まじめ志向	.238**	−.148**	.010	.006

**1％水準で有意（両側）。
*5％水準で有意（両側）。

なお、表７には、「まじめ志向」と授業評価の相関係数も、あわせて示しておいた。「まじめ志向」の強い学生ほど、(a)「授業に対する肯定的評価」が高まり、(b)「授業に対する『生徒』的要望」は弱まることも分かる。ただし、(b) については、相関係数の大きさから判断すれば、「生徒化」傾向の約半分ほどの関係性しかもたない。

4. 「生徒化」傾向と、大学生活における重点、生活時間

それでは、「生徒化」傾向が強い学生は、大学生活のなかで、どのような活動に重きをおいているのだろうか。表８は、「生徒化」傾向と、大学生活における重点、および授業出席率との関係をみたものである。

なお、学生全体では「生徒化」傾向の中央値は、１点〜２点の２段階評価で、1.3 に位置した。つまり、学生全体としては、「生徒化」傾向はそれほど強くないといえる。それはさておき、ここでは、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケースでサンプルを二分し、それぞれ「生徒化傾向」低位群と高位群とに分類することにした。サンプル数は、低位群 1,208 人、高位群 526 人となる。

表８から分かるように、「生徒化」傾向の強い学生ほど、5% の有意水準で、「勉強志向」が高くなる傾向がみられる。さらに、1% の有意水準で、「授業出席率」も高い傾向がみられる。のみならず、平日における１日あたりの生活時間についてみれば、表９に示したように、「生徒化」傾向の強い学生ほど、「授業の予習・復習時間」は、1% の有意水準で長い。つまり、授業に関連した大学外学習時間も長い。しかし、「読書時間」は 1% の有意水準で明らかに短い。

表８　生徒化傾向と学生生活の重点・授業出席率

	平均値			標準偏差		
	生徒化高		生徒化低	生徒化高		生徒化低
勉強志向	1.92	＞	1.87	0.44		0.44
友人との交友・趣味志向	2.68		2.69	0.66	＞	0.62
アルバイト・恋愛志向	2.11		2.13	0.72		0.69
サークル・部活動志向	2.24	＜	2.37	1.10		1.11
就職活動志向（３・４年生）	2.07		1.94	0.92		0.97
授業出席率（％）	92.0	＞＞	87.5	6.71	＜＜	12.75

(1) 二重不等号は、１％水準で有意。
一重不等号は、５％水準で有意。
(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「１　90％以上」、「２　89〜80％」、「３　79〜60％」、「４　59〜40％」、「５　39％以下」、となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

表９　生徒化傾向と平日における１日あたりの生活時間

（単位：時間）

	平均値			標準偏差		
	生徒化高		生徒化低	生徒化高		生徒化低
授業の予習・復習時間	0.51	>>	0.42	0.74		0.66
読書時間	0.46	<<	0.58	0.73	<<	0.82
スマートフォン・携帯電話使用時間	2.58		2.49	1.28		1.28
アルバイト時間	2.54		2.49	1.70		1.67

(1) 二重不等号は、１％水準で有意。
　　一重不等号は、５％水準で有意。
(2) 各生活時間を「３時間以上」行っているとの回答については、「４時間」の数値を与えて計算。

冒頭で述べたように、1995 年以降、学生のあいだで「勉強」重視傾向が顕著に強まっていた。こうしてみると、この現象の一つの要因として、主体的な「勉強志向」というよりは、受け身の姿勢をもとに「出席管理」、「学生の自主性より教員による管理重視」などを求める「生徒化」した、「まじめ・勉強文化」が進行していることが示唆される。しかも、表 2・表 4 から明らかなように、「生徒化」傾向と、「社会に出た時に役立つ知識や技術」を大学教育に求める姿勢は、強く関連していた。だとすれば、とくに就職を中心として「役に立つ」内容こそを重視した「勉強志向」である可能性が高い、といえる。

表 8 に戻れば、「勉強志向」とは逆に、「生徒化」傾向の強い学生ほど、5% の有意水準で、「サークル・部活動志向」が低い傾向もみられる。サークル・部活動へのコミットは、自主性を高め、受け身の「生徒化」傾向を低める効果をもつ可能性のあることが示唆される[21)]。

また、標準偏差に着目すると、「友人との交友・趣味志向」については、「生徒化」傾向高位群の方が、低位群に比べて、5% の有意水準で、バラツキが大きい傾向がみられる。つまり、「生徒化」傾向の高い学生グループでは、「友人との交友・趣味」に重点をおく学生群と、それほど重きをおかない学生群に、二極分化している傾向の強いことが示唆される。

同様に、「授業出席率」に関しては、「生徒化」傾向低位群の方が、高位群に比べて、1% の有意水準で、バラツキの大きい傾向がみられる。つまり、「生徒化」傾向の低い学生グループのなかにも、授業にきわめてまじめに出席している学生の一群が在している、といえる。

さらに、表 9 についていえば、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」に有意な差は認められなかった。そして、標準偏差をみる限り、「生徒化」傾向の低い学生のなかにも、「読書時間」がきわめて少ない学生の一群が存在していることも確かである。

5. 「授業に対する『生徒』的要望」と大学生活における重点

ここで、「授業に対する『生徒』的要望」と、大学生活における重点との関係も、表 10 で確認しておこう。

なお、学生全体では「授業に対する『生徒』的要望」度の中央値は、1 点～5 点の 5 段階評価で、3.7 に位置した。つまり、学生全体としては、「授業に対する『生徒』的要望」が多分に優勢を占めていることになる。それはさておき、ここでも、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケースでサンプルを二分し、それぞれ「授業に対

表 10　授業に対する『生徒』的要望と学生生活の重点

	平均値			標準偏差		
	授業に対する『生徒』的要望高		授業に対する『生徒』的要望低	授業に対する『生徒』的要望高		授業に対する『生徒』的要望低
勉強志向	1.88		1.89	0.44		0.44
友人との交友・趣味志向	2.73	＞	2.65	0.65		0.62
アルバイト・恋愛志向	2.20	＞＞	2.07	0.71		0.68
サークル・部活動志向	2.28		2.37	1.09		1.11
就職活動志向（３・４年生）	2.09		1.90	0.96		0.94

二重不等号は、１％水準で有意。
一重不等号は、５％水準で有意。

する『生徒』的要望」低位群と高位群とに分類することにした。サンプル数は、低位群 978 人、高位群 787 人となる。

「授業に対する『生徒』的要望」度が高い学生ほど、「アルバイト・恋愛志向」および「友人との交友・趣味志向」の強いことが確かめられる。なお、後者には 5% の有意差しか認められなかったのに対し、前者には 1% の有意差が検出された。つまり、前者で、以上の傾向がより強いことも分かる。

ただし、「勉強志向」については、「授業に対する『生徒』的要望」度による有意な差は認められなかった。「サークル・部活動志向」に関しても同様である。さらに、授業出席率との関係もみてみたが、これについても有意な差は検出されなかった。

6. 「生徒化」学生の属性

それでは、どのような属性をもった学生ほど、「生徒化」しているのだろうか。

第 1 に、性別でみれば、「生徒化」傾向は、男子学生 1.31、女子学生 1.39 となり、女子学生の方が、1% の有意水準で高い傾向が確認された。

第 2 に、図 3 から明らかなように、浪人年数が長いほど、「生徒化」傾向が低くなっている。

第 3 に、図 4 で、入学方法との関連をみれば、「推薦入試」、「AO 入試」、「一般入試（セ

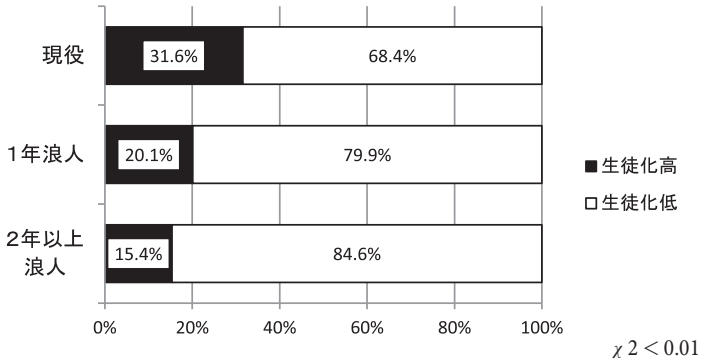

図 3　現役・浪人別にみた生徒化志向

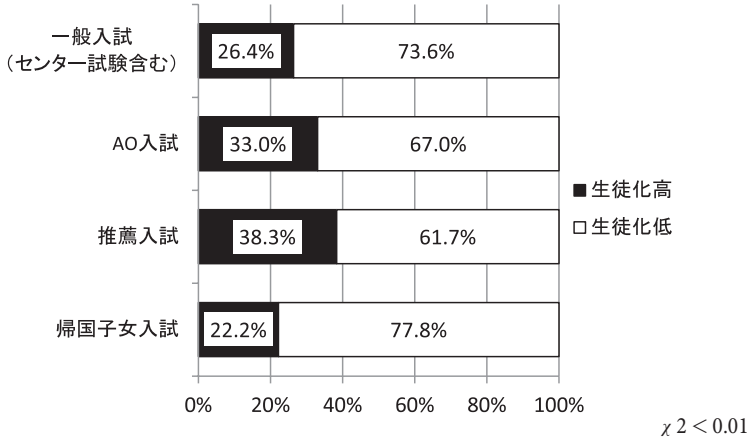

図４　入学方法と生徒化志向

ンター試験を含む)」、「帰国子女入試」入学者の順に、「生徒化」傾向が強い。自主性が重視される外国教育経験者で、「生徒化」度が低くなるのは、ある意味で当然の結果として、「一般入試（センター試験を含む)」に比べて、「推薦入試」・「AO 入試」入学者で、「生徒化」傾向が強い点は示唆的である。

第 4 に、大学進学理由との関連についても確認しておこう。大学に進学した理由ついては、「その他」を除いて、(1)「大学卒の学歴を得るために」、(2)「(さまざまな）資格（教員免許、学芸員など）をとるために」、(3)「友人関係、サークル、スポーツ、趣味を楽しむために」、(4)「自分の将来の進路や仕事について考えるために」、(5)「専門的な知識や技術を得るために」、(6)「幅広い教養を身につけるために」、(7)「みなが大学に行き、行くのが当たり前だった」、(8)「親が勧めるので」、の 8 つの選択肢から 2 つを選択する形式で質問している。

これら 8 つの選択肢についてそれぞれ、それを進学理由として選んだ学生と、選ばなかった学生に 2 分して、「生徒化」傾向の平均値を比較してみた。その結果、5% 未満の有意差が認められた進学理由は、「(さまざまな）資格（教員免許、学芸員など）をとるために」のみであった。この進学理由を選んだ学生と、選ばなかった学生の、「生徒化」傾向の平均値は、それぞれ 1.41 と 1.33 となり、資格取得を目的として大学に進学してきた学生の方が、「生徒化」傾向が 1% の有意水準で強い。また、標準偏差についても 1% の有意水準で差が認められ、前者が 0.290、後者が 0.285 となった。つまり、資格取得を目的として大学に進学してきた学生は、そうでない学生に比べて相対的に、「生徒化」傾向の強い学生と、弱い学生に二極分化している傾向のあることが分かる。

第 5 に、今回の調査では、(1)「自宅」、(2)「アパート、マンション、下宿」、(3)「学生寮、学生会館」、(4)「親戚、知人の家」、(5)「その他」といった選択肢で、居住形態を聞いている。また、出身高校について、(1)「国公立大学や難関大学への入学者が多い学校」、(2)「普通の大学への入学者が多い学校」、(3)「短大・専修・専門学校への入学者が多い学校」、(4)「就職する人が多い学校」、といった選択肢を用い、高校ランクを尋ねている。こ

れら２つの属性、および「知的家庭環境（文化資本）」別に、「生徒化」傾向の度合いを確認してみた。しかし、そこにはすべて、有意な差はみられなかった。

7. 「まじめ志向」学生の特徴

先に表２に示したように、学生の大学観については、「生徒化傾向」を表す因子の他に、「まじめ志向」の因子が抽出された。そこで最後に、「まじめ志向」が強い学生の特性についてもみておこう。

学生全体では「まじめ志向」の中央値は、１点～２点の２段階評価で、1.5 に位置した。つまり、学生全体としては、「まじめ志向」が強い学生とそうでない学生がちょうど半々存在することになる。ここでも、その中央値を基準にして、それ以下のケースと、それより大きいケースでサンプルを二分し、それぞれ「まじめ志向」低位群と高位群に分類することにした。サンプル数は、低位群 1,119 人、高位群 612 人となる。

まず、大学生活における重点、および授業出席率との関係を、表 11 で確かめておこう。

「まじめ志向」の高い学生ほど、当然のごとく「勉強志向」が強く、「授業出席率」も高い。これに対し、「まじめ志向」の低い学生ほど、「友人との交友・趣味志向」、「アルバイト・恋愛志向」、「サークル・部活動志向」が強い。以上については、いずれも 1% 水準で有意差が検出された。こうしてみると、勉強重視の「まじめ志向」派と、それ以外の「遊び（課外活動）」重視派に、学生がはっきり色分けされていることは明らかである。

ただし、「まじめ志向」低位群は、高位群に比べて、「勉強志向」、「授業出席率」は、1% の有意水準で、明らかに標準偏差が大きい。このことは、「まじめ志向」の低い学生グループが、以下の２つの集団に二極分化していることを示している。第１が、課外活動にのめり込み、勉強・授業へのコミットが明らかに弱い集団である。第２が、課外活動に重点を置きながらも、おそらく「楽な」授業を中心にしてとはいえ、勉強もそこそこに行っている集団である。あるいは、大学の「学校化」が進展するなかで、いやおうなく勉強を重視せざるをえない状況を反映した結果である可能性も存在する。

表 11　まじめ志向と学生生活の重点・授業出席率

	平均値			標準偏差		
	まじめ志向高		まじめ志向低	まじめ志向高		まじめ志向低
勉強志向	2.04	>>	1.80	0.41	<<	0.44
友人との交友・趣味志向	2.60	<<	2.73	0.63		0.64
アルバイト・恋愛志向	2.00	<<	2.19	0.70		0.69
サークル・部活動志向	2.16	<<	2.43	1.07	<	1.11
就職活動志向（３・４年生）	1.86		2.03	0.93		0.96
授業出席率（%）	91.3	>>	87.6	8.90	<<	12.43

(1) 二重不等号は、１%水準で有意。
　一重不等号は、５%水準で有意。
(2) 調査票では、授業出席率の選択肢は、「１　90%以上」、「２　89～80%」、「３　79～60%」、「４　59～40%」、「５　39%以下」、となっているが、それぞれの範囲の中央値を用いて算出。

つぎに、平日における１日あたりの生活時間との関係を、表 12 で確認しておこう。「まじめ志向」の高い学生は、それが低い学生に比べて、「授業の予習・復習時間」のみならず、「読書時間」も長い。そして、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」は短い。以上にはいずれも 1% 水準での有意差が確認できる。ただし、どの生活時間についても、「まじめ志向」高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が有意に大きい。つまり、「まじめ志向」の強い学生のなかにも、「授業の予習・復習時間」や「読書時間」が非常に少なく、「アルバイト時間」や「スマートフォン・携帯電話使用時間」が、きわめて長い学生の一群が存在していることが示唆される。

それでは、「まじめ志向」が強い学生は、どのような属性をもっているのだろうか。

第１に、性別でみれば、「まじめ志向」度には、平均値・標準偏差ともに、5% 水準の有意差が確認できた。その平均値は、男子学生 1.54、女子学生 1.59 となり、女子学生の方が高い傾向が確認された。ただし、標準偏差はそれぞれ 0.390、0.356 となり、男子学生の方が高い。つまり、男子学生のなかにも、「まじめ志向」のきわめて強い学生の一群が存在していることが示唆される。

第２に、図５から分かるように、浪人年数が長いほど、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多くなっている。

第３に、図６に示したように、入学方法でみれば、「AO 入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」、「推薦入試」入学者の順に、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多くなっている。「AO 入試」の本質的な目的は、学力は別として、大学に進学してからの学習意欲の高い学生を入学させることにあるとすれば、その選抜方法が機能しているともみなせる。

第４に、「まじめ志向」高位群と低位群について、「知的家庭環境（文化資本）」得点を算出すれば、１点～４点の４段階評価の、平均値ではそれぞれ 2.53 と 2.33、標準偏差では 0.638 と 0.706 となり、いずれも 1% 水準で有意差が確認された。つまり、「まじめ志向」高位群の方が、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生が多い。ただし、「まじめ志向」低位群のなかにも、「知的家庭環境（文化資本）」が豊かな状況のもとで育ってきた学生の一群が存在していることが示唆される。

表 12　まじめ志向と平日における１日あたりの生活時間

（単位：時間）

	平均値			標準偏差		
	まじめ志向高		まじめ志向低	まじめ志向高		まじめ志向低
授業の予習・復習時間	0.73	＞＞	0.29	0.88	＞＞	0.50
読書時間	0.74	＞＞	0.44	0.92	＞＞	0.71
スマートフォン・携帯電話使用時間	2.21	＜＜	2.69	1.33	＞＞	1.22
アルバイト時間	2.24	＜＜	2.66	1.70	＞	1.65

(1) 二重不等号は、１％水準で有意。
　　一重不等号は、５％水準で有意。
(2) 各生活時間を「３時間以上」行っているとの回答については、「４時間」の数値を与えて計算。

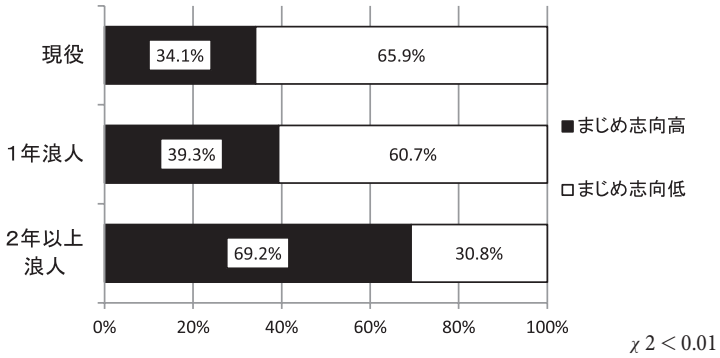

図５　現役・浪人別にみたまじめ志向

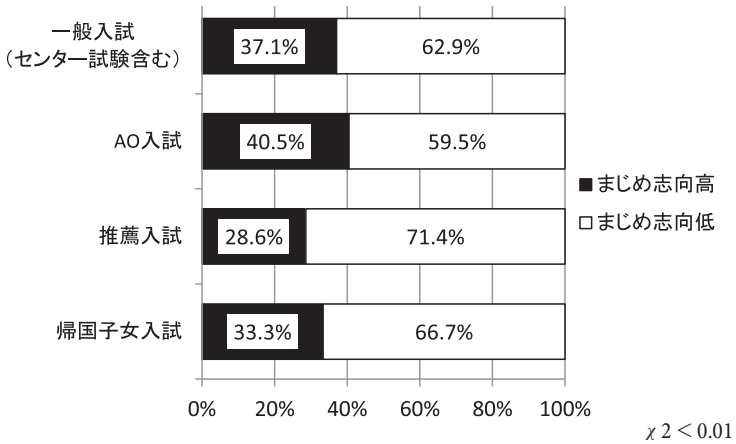

図６　入学方法とまじめ志向

第５に、居住形態および出身高校ランクと、「まじめ志向」とのあいだには、有意な差は認められなかった。

8.　まとめ

一昔前までの日本の大学は、高校時代までとは異なり、学生の自主性を重んじ、学生の生活や学習について、教員が手取り足取り指導することは、まれであった。しかし、とくに1990年代以降、18歳人口減にともなう各大学の志願者確保戦略の一貫として、高校時代までの「『生徒指導』『生活指導』」のごとく、「学生の現在と未来にわたる生活の様々な側面に関してきめ細かくケアする」ような、「大学のサービス化」傾向が強まっていった。また、教育に重きをおく、90年代以降の一連の大学改革によって、一昔前までの大学とは異なり、出席・成績管理を強めて行った。その良し悪しの評価は別として、このような傾向を、本論では、大学の「初中等『学校化』」と呼ぶことにした。

そして、そのような大学の「初中等『学校化』」に対応する、学生の意識を「大学生の生徒化」と名付けることにした。それでは、これらの「生徒化」した学生、つまり大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、どのような特徴をもっているのだろうか。以下に列記しておこう。

(1)「社会に出た時に役立つ知識や技術」を求める傾向を、資格志向につながる意識とみなして、これを大学の「専門『学校化』」感覚と呼べば、大学の「初中等『学校化』」感覚をもつ学生は、大学の「専門『学校化』」感覚も、合わせてもつ傾向がみられた。つまり、それら2つの感覚をあわせた意味での、「大学の学校化」感覚をもつことこそが、「生徒化」学生の特徴になる。

(2) 学年が上がるにつれ、つまり高校から離れ大学生活が長くなるほど、「生徒化」傾向から脱却していく学生は多くなる。ただし、「生徒化」傾向からなかなか抜け出せない学生の一群も存在しており、「生徒化」傾向の高い学生と低い学生に、二極分化していく様相も確認できる。

(3) 心性として「生徒化」傾向をもつ学生ほど、「授業に対する『生徒』的要望」が強くなる。また、「生徒化」している学生が多い大学ほど、教員に注意して欲しくなるほど、私語のうるさい授業がたくさんある。

(4)「生徒化」傾向の高い学生ほど、「勉強志向」が強い。そして、「授業の予習・復習時間」は長く、「授業出席率」も高い。しかし、「読書時間」は短い。

いくつかの調査で明らかにされているように、1995年以降、学生のあいだで「勉強」重視傾向が顕著に強まっている。こうしてみると、この現象の一つの要因として、主体的な「勉強志向」というよりは、受け身の姿勢をもとに「出席管理」、「学生の自主性より教員による管理重視」などを求める「生徒化」した、「まじめ・勉強文化」が進行していることが示唆される。しかも、「生徒化」傾向と、「社会に出た時に役立つ知識や技術」を、大学教育に求める姿勢は強く関連していた。この点も勘案すれば、とくに就職を中心として「役に立つ」内容こそを重視した「勉強志向」である可能性が高いといえる。

(5)「勉強志向」とは逆に、「生徒化」傾向の高い学生ほど、「サークル・部活動志向」が低い。サークル・部活動へのコミットは、自主性を高め、受け身の「生徒化」傾向を低める効果をもつ可能性のあることが示唆される。一方、「生徒化」傾向の高低によって、「アルバイト・恋愛志向」の強さ、および「アルバイト時間」の長さに差は認められなかった。この点からは、アルバイトや恋愛へのコミットは、「生徒化」傾向の低減に寄与しないことが示唆される。

(6)「友人との交友・趣味志向」については、「生徒化」傾向高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が大きい。つまり、「生徒化」傾向の高い学生グループでは、「友人との交友・趣味」に重点をおく学生群と、それほど重きをおかない学生群とに、二極分化している傾向の強いことが示唆される。

(7) 行動面における「生徒化」傾向の表れとみなせる、「授業に対する『生徒』的要望」度についてみれば、その度合いが高い学生ほど、「アルバイト・恋愛志向」および「友人との交友・趣味志向」が強かった。ただし、「生徒化」傾向の強弱によって、「勉強志向」およ

び授業出席率や、「サークル・部活動志向」に関しては、差は認められなかった。この点は、「生徒化」現象については、意識面と行動面を分離して分析する必要があることを示唆している。

（8）「生徒化」傾向が強い学生の属性についてみれば、以下のような特徴が観察された。

① 性別でみれば、女子学生の方が男子学生より、「生徒化」傾向は強い。

② 浪人年数が長いほど、「生徒化」傾向が低い。

③ 入学方法別にみると、「推薦入試」、「AO 入試」、「一般入試（センター試験を含む）」、「帰国子女入試」入学者の順に、「生徒化」傾向が強い。自主性が重視される外国教育経験者で、「生徒化」度が低くなるのは、ある意味で当然の結果として、「一般入試（センター試験を含む）」に比べて、「推薦入試」・「AO 入試」入学者で、「生徒化」傾向が強い点は示唆的である。

④ 大学進学理由との関連でみれば、資格取得を目的として大学に進学してきた学生の方が、「生徒化」傾向が強かった。それ以外の大学進学理由については、有意差は認められなかった。ここでも、「生徒化」意識が「資格志向」と強く結びついていることが確認できる。ただし、標準偏差をもとにすれば、資格取得を目的として大学に進学してきた学生は、そうでない学生に比べて相対的に、「生徒化」傾向の強い学生と、弱い学生に二極分化している傾向がみられる。

⑤ （a）「自宅」、「アパート、マンション、下宿」、「学生寮、学生会館」、などの居住形態、（b）高校ランク、（c）「知的家庭環境（文化資本）」といった属性と、「生徒化」傾向の度合いには、有意な差はみられなかった。

（9）大学観をもとにした因子分析の結果、「生徒化」意識に関わる因子の他に、「まじめ志向」を表す因子が抽出された。「まじめ志向」とは、つぎのような意識が強いことである。（a）「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」というよりは、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強を中心に生活を送るべきだ」と考える。のみならず、（b）「単位が楽に取れる科目を選択したい」というよりは、「単位を取るのが大変でも、自分の興味のひかれる科目を選択したい」という意識をもっていることである。

「まじめ志向」の強い学生についても、その特徴を調べてみた。この結果、以下の点が明らかになった。

（10）「まじめ志向」の高い学生ほど、当然のごとく「勉強志向」が強く、「授業出席率」も高い。そして、「授業の予習・復習時間」のみならず、「読書時間」も長い。これに対し、「まじめ志向」の低い学生ほど、「友人との交友・趣味志向」、「アルバイト・恋愛志向」、「サークル・部活動志向」が強い。そして、「アルバイト時間」、「スマートフォン・携帯電話使用時間」は長い。こうしてみると、勉強重視の「まじめ志向」派と、それ以外の「遊び（課外活動）」重視派に、学生がはっきり色分けされていることは明らかである。

ただし、「まじめ志向」低位群は、高位群に比べて、「勉強志向」、「授業出席率」についての標準偏差は、明らかに大きい。このことは、「まじめ志向」の低い学生グループが、以下の 2 つの集団に二極分化していることを示している。第 1 が、課外活動にのめり込み、勉

強・授業へのコミットが明らかに弱い集団である。第2が、課外活動に重点を置きながらも、おそらく「楽な」授業を中心にしてとはいえ、勉強もそこそこに行っている集団である。あるいは、大学の「学校化」が進展するなかで、いやおうなく勉強を重視せざるをえない状況を反映した結果である可能性も存在する。

また、生活時間についていえば、どの活動に関しても、「まじめ志向」高位群の方が、低位群に比べて、標準偏差が大きい。つまり、「まじめ志向」の強い学生のなかにも、「授業の予習・復習時間」や「読書時間」が非常に少なかったり、「アルバイト時間」や「スマートフォン・携帯電話使用時間」が、きわめて長い学生の一群が存在していることが示唆される。

(11)「まじめ志向」の強い学生ほど、(a)「授業に対する肯定的評価」が高まり、(b)「授業に対する『生徒』的要望」は弱まる。ただし、(b)については、相関係数の大きさから判断すれば、「生徒化」傾向の約半分ほどの関係性しかもたない。

(12)「まじめ志向」が強い学生の属性については、以下のような特徴がみられた。

①性別では、男子学生のなかにも「まじめ志向」がかなり強い学生の一群が存在するものの、全体としてみれば、女子学生の方が男子学生より、「まじめ志向」が強い。

②浪人年数が長いほど、「まじめ志向」をもつ学生の比率は多い。

③入学方法については、「AO入試」、「一般入試(センター試験を含む)」、「帰国子女入試」、「推薦入試」入学者の順に、「まじめ志向」の学生の比率は多くなっている。「AO入試」の本質的な目的は、学力は別として、大学に進学してからの学習意欲の高い学生を入学させることにあるとすれば、その選抜方法が機能しているともみなせる。

④「まじめ志向」の高い学生の方が、「知的家庭環境(文化資本)」が豊かな状況のもとで育ってきた学生が多い。ただし、標準偏差をもとにすれば、「まじめ志向」の低い学生のなかにも、「知的家庭環境(文化資本)」が豊かな状況のもとで育ってきた学生の一群が、存在していることが示唆される。

⑤居住形態および出身高校ランクと「まじめ志向」とのあいだには、有意な差は認められなかった。

註

1) 比較的最近のデータまで提示したものとしては、以下の①の文献参照。

① 岩田弘三「大学生活費とキャンパス文化の推移」、『バブル崩壊後の学生の変容と現代学生像—「学生生活実態調査をはじめとした調査分析」報告書—』、全国大学生活協同組合連合会、2012年、PP. 77−79。

2) 引用は①の文献から。同様の指摘は、②の論文でもなされている。

① 武内清『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社、2014年、PP.53−54。

② 武内清「現代青少年の安定志向」、『教育と医学』2010年1月号、P.54。

3) これについては、以下の①の文献参照。

なお、②の文献をもとにすれば、竹内洋も同様の問題関心をもっていることが分かる。「いまの大学生は、高校生とみるとわかりやすい。授業にほぼ皆出席。先生、先生と寄ってくる。わか

りやすい授業をもとめたがる」（P.257）。「少子化と定員割れの急増とそれへの恐怖から、お客様（学生さま）大学になっているところもある。…過保護状態である」（PP.232−233）。「いまや半数以上が大学に進学する時代」となったため、「高校と大学のアーティキュレーション（接合）が大切とされ、初年次教育などがさかんになった」。このような動向を含めて、「大学の顧客サービス業化」とでも呼べるような状況が進行した。つまり、大学は、「学生というお客様へのサービス産業になった。…これだけ大学教育が手取り足取りでは、企業などに就職して“人材”となりうるだろうか。『指示待ち社員』どころか、『お客様社員』では困らないだろうか」（PP.247−248）。そのように指摘しているからである。

① 岩田弘三「キャンパス文化の変容」、稲垣恭子〈編〉『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社、2011 年。

② 竹内洋『大衆の幻像』中央公論社、2014 年。

4） 代表的なものとして、以下の 2 つの文献をあげておく。

なお、②の文献のなかで、上野は、「学校化」の現れとして、「出席を取ってくれ、教科書を決めてくれ、と要求する学生が現れはじめた」ことなどを問題視しているので（PP.15−18）、一部の問題関心は共有されていることになるといえる。

① イヴァン・イリッチ（東洋・小澤周三〈訳〉）『脱学校の社会』東京創元社、1977 年。

② 上野千鶴子『サヨナラ、学校化社会』太郎次郎社、2002 年。

5） 以下で述べるように、これら 2 つの要因が「大学の『学校化』」をもたらし、それが「生徒化」に寄与しているとすれば、それ以外の第 3 の「生徒化」促進要因として、「『学生文化』と『生徒文化』のボーダレス」化現象も考えられる。つまり、「最近では、デートやアルバイトのみならず、飲酒や喫煙、女子生徒の化粧などは、高校のみならず中学校でさえ日常的な風景と化してしまった。つまり、『大学生文化』が、高校までの『生徒文化』に大々的に浸潤を始めた結果、かつての高校『裏文化』が、何の後ろめたさも伴わない、『表文化』に浮上した。言い換えれば、それらは、大学に入るまでの禁欲的試練に打ち勝ち、『大人』の入り口に達した学生だけが晴れて謳歌できる特権ではなく、単なる高校生活の延長線上に、位置づけられる行為にすぎなくなった」ことである。この点については、以下の①の文献参照。

① 前掲、岩田、2011 年、PP.43−44。

6） 伊藤茂樹「大学生は『生徒』なのか―大衆教育社会における高等教育の対象―」、『駒沢大学教育学研究論集』第 15 号、1999 年、PP.103−106。

7） これについては、以下の①の文献参照。また、「生徒化」に関連する研究については、②の文献による優れたレビューがあり、そこでは、批判的な検討もなされているので、そちらに譲ることとする。

① 前掲、伊藤、1999 年、P.85。

② 新立慶「大学生の『生徒化』論における批判的考察」、『教育論叢』第 53 号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻、2010 年。

8） 前掲、伊藤、1999 年、P.85 および P.92。

9） 同論文、P. 87。

10） 前掲、岩田、2011 年、PP.33−34。

11） 調査の概要については、紙幅の関係もあり、割愛せざるをえなかった。詳細に関しては、脚注の後に付記しておいた、日本学術振興会科学研究費助成事業の報告書を参照。

なお、この調査は、1997 年、2003 年、2007 年、2013 年の 4 時点について、16 年間にわたって継続的に行われてきた調査の一つである。

12） なお、今回の分析では、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強

くなるように、変換している。

13） なお、この第 3 因子に属する 2 つの項目と、「私語の多い授業がある」については、他の項目が意識・評価に関する項目であるのに対し、事実認識に関する項目となっている。それゆえ、それらを一律に扱って因子分析にかけることが適切であるかどうか、という問題がある点だけ付記しておきたい。

14） この点については、自己評価ではなく、実際の成績をもとにした分析でも確認されている。詳しくは、以下の①の文献参照。

① 岩田弘三・北條英勝・黒河内利臣「武蔵野大学全学基礎教育課程に関する授業評価についての分析」、『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要　The Basis』第 2 号、2012 年。

15） 学年別にみた場合、「就職活動に役立つことをもっと教えてほしい」という要望をもつ学生の比率は、無回答を除けば、「とてもそう思う」+「ややそう思う」の合計で、1 年生 62.4%、2 年生 55.0%、3 年生 55.6%、4 年生 52.3% となる。つまり、1 年生でとくに高いことが目を引く。また、調査時期が 11～12 月であるにもかかわらず、4 年生でも半数以上の学生が、就職活動向けの知識に対する要望をもっていることになる。後に詳述するように、学生生活において「就職活動」の比重が、まだ「大部分」+「かなり」占めていると答えた 4 年生の比率は、3 年生とほぼ同水準となっている。つまり、この時期まで就職活動を引きずっている学生が、まだ多数いるためと考えられる。ただし、就職活動向けの知識への要望をもっている学生の比率は、4 年生では 3 年生より幾分低くなっている。4 年生のなかでも就職が決定した学生にとっては、就職活動向けの知識の必要性が減少することが、原因になっていると考えられる。その点は次のことからも裏づけられる。この質問項目に対する回答の標準偏差をみると、1 年生・2 年生はともに 0.04、3 年生 0.06、4 年生 0.09 と、4 年生でとくに高くなっている。つまり、就職活動向けの知識への要望が切実な就職未定学生と、そうでない学生の二極分化が起こっていることが示唆されるからである。ただし、今回の調査では、就職内定の有無に関する質問がないので、正確な解釈はできない。

16） さらに、因子得点すなわち関係性は多少低いものの、第 4 因子つまり「私語の状況」を構成する主要要素も、第 2 因子の関連要素になっている。ただし、それらを含めて以上の項目は「私語の多い授業がある」を除けば、いずれも要望に関する項目になっており、註 13）で指摘した点と同様の問題をもつことには、注意が必要である。

17） なお、ここでも、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強くなるように、変換している。

18） 調査時期は多くの大学で基本的には 11～12 月だったことを勘案すれば、今回の調査サンプルの 3 年生の「就職活動」重視率は、異常に低い印象を受ける。大学別にみた場合、多少の例外を除いて、偏差値が比較的高い大学で、3 年生の「就職活動」重視率はきわめて低い傾向がみられた。この点を勘案すると、偏差値が比較的高い大学の 3 年生の場合、この時期すでに内定を確保してしまっており、「就職活動」を重視する必要がなくなった学生が、多数存在する可能性がある。

19） ①岩田弘三「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」、『大学教育研究』第 7 号、神戸大学・大学教育研究センター、1999 年。

②岩田弘三「第 1 志望以外入学者の学生生活・大学満足度の学年変化」、『武蔵野大学現代社会学部紀要』第 7 号、2006 年。

20） なお、ここでも、調査票の選択肢の得点とは異なり、得点が高いほどそれらの傾向が強くなるように、変換している。

21） 伊藤茂樹は、以下の①の論文で、サークルで中心的・指導的役割を果たしている学生ほど、「生徒化」度の低くなる傾向がみられることを根拠に、同様の指摘をしている。ただし、伊藤の調査

結果では、生徒化度が高くなっても、低くなっても、サークル加入率およびサークルへの期待をもつ学生の比率は、減少していく傾向がみられる。これに対し、今回の調査では、生徒化度が低くなるほど、「サークル、部活動」重視度のみならず、数値は割愛するものの、その加入率についても、明らかに上昇する傾向が確認された。

① 前掲、伊藤、1999 年、PP.96−97。

【付記】 本研究は、平成 24 年～26 年度　日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C））「現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究―学生の「生徒化」に注目して―」（研究代表・武内清、研究課題番号 :24531072）の成果の一部である。